

イベントの大トリはセクシーダンスユニット「PINK BOMB」を伴った「EL DRA」ライブ。「まだ欲しいんですか?」。挑発的なシャウトが響く

野生の孔雀が傷ついたら、 羽根を広げると、 アングラバンドから、 上を目指す。

人は何故、自傷行為に及ぶのだろうか。多くの場合、それは禁忌とされる行為であるのに。時に人は、悲しみや怒り、そして愛しさ、抑えきれない衝動を自らに打ち付ける。それは自らを死に追いやるネガティブな行動ではなく、むしろ生き抜いてやるという前向きな、そして上向きな行動なのである。少なくとも、彼らにとっては。

D・ベッカムはこう言った。一度入れると、また入れたくなるのがタトゥーだと。それは

稀代のフットボールプレイヤーに限ったことではない。ある者は、レジスタンスのために。ある者は、他と一線を引くために。またある者は、ファッションとして。理由は様々だが、自分に背負わせるものとして、捉えている。

「彫ってどう、という訳じゃないんですよね。自分に何を刻むのか、それが形になったものから。彫ると前の自分と違う感覚になるのかもしれない。そう語るのはサイケデリック・デジタル・ラウドロックの代名詞「EL DRA」のヴォーカリストであ

り、俳優としても活躍する吉田由一さん。「ボクは入れてないから、解らへんねんけど(笑)」。『由一さんは妻いのを入れてはるのに、簡単に見せはらへんのはスゴイ』とか、えらい大げさなことを言われるけど、入れてません(笑)。裸でプレイするのがイヤなだけで(笑)。』とは言え、「TATTOO COME、IN! IN! IN!』という自身のイベントもオーガナイズしているわけで、今回、エルドラの親衛隊長でもある宇野昇さんが代表を務める「OMG、MG」が滋賀県で定例として行っている同イベントのプロデュースをオファーされた際は、「お手のもの」と言わんばかりに引き受けた。タトゥーを彫る実

演に、ストリートダンス、彼らをバックアップする協力者による豪華賞品の抽選会、そして「ステージはセックスやと思ってます」と言い切る自らのライブを組み合わせて仕上げて見せた。「アングラサウンドカールチャーだから、基本的に商業ベースにのイベントじゃない。でも幅広い人たちに観て欲しいとは思っただけだ」。

誰もが自分に何かを刻んで生きている。だが多くの場合、それは心に、である。哲学や美学と呼ばれるものもそうだろう。ならばタトゥーは身に刻んだ美学だ。ステージパフォーマンスは一夜限りの目に見える哲学だ。

そして、それがアングラサウンドにいるならば、行き場はそう、上しかないのだ。





前半のステージとフロアを温めた「烏来KYOTO (ウーライキョウト)」。最近ではアジアツアーもこなし、EL DRAライブでもしなやかな肢体を惜しげもなく



HIP HOPが本来持っている強いメッセージ性が真骨頂か、「アナーキー」のステージ。王道的なステージは、かなりハードだったはずである

ストリートダンスカルチャーの名人「ひとり」でできるもんも極上ダンスを披露。「どういふ身体をしてるんだ？」という絶技に観客は舌を巻く

北海道旅行やFOXの毛皮などなど、とんでもない豪華商品が並んだ抽選会のプレゼンターには、もはや全国区モデル、「FOCUS」のケイトに、何と、格闘家・秋山成勲が登場！



結成以来、「EL DRA」のリズムを支えてきたTOMMYは今宵がラスト・ステージ。惜しまれつつ、完全に海外を拠点とすることになった